

## 自己実現を拒む4つの壁

——ライト、ヘミングウェイ、カポーティにおける  
内的自由の見地からみた自己実現の形——

市村史恵

「人間の生活の影を成している部分は、自己実現と常に表裏一体を成している」これが私がこの4年間で打ち出した自論である。ここで述べた「人間の生活の影を成している部分」とは、他人の意識に触れることのない、自己が自己に課す問題意識との闘いや、心の内部での感情の葛藤やさまざまな苦悩との闘いのことである。我々は、生きていく過程の行為の集結として自己実現を掲げ、何らかの形でそれを成し遂げるために毎日格闘しているのだ。

「幸福を得ること」と「自己実現を果たすこと」の二つの概念は、互いに絡み合っており、その源泉を同じくしている。つまり「幸福」とは、自己実現あるいは自己発見という形で具現化され、その感情の至りとして、人々が思いこがれる源郷なのだ。しかし、だれしも幸福を得る権利は所有しているにもかかわらず、この権利の保証の不安定さに閉口した経験があるだろう。なぜだろうか。それは、我々の幸福を拒む壁が、自己実現を拒む壁が、何らかの形で必ず存在しているからである。その壁というのが、冒頭で述べた「人間の生活の影を成す部分」を指すのである。その影は、時として底無し海のよう到我々を飲み込むか、あるいは樹海のように我々を惑わせ、気をくじかせ、光の差し込む出口を見失わさせる。私はその壁、自己実現を拒んでいる壁をいくつかの作品を追って行く中で、おぼろげながらもつきとめた。つまり、リチャード・ライト (Richard Wright, 1908-1960)、アーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway, 1899-1961)、トルーマン・カポーティ (Truman Capote, 1924-1984) たちの思想の根底には、ある1つの共通したテーマが潜んではいまいかと考えたのである。それは、①罪の概念の位置づけ②ハンディキャップが人間に与える苦悩(これは心身の障害の意味の他に、作意的に作られた、あるいは人々の概念によって築き上げられた人為的ハンディキャップ—差別—を含む) ③孤独(罪、ハンディキャップの問題と関連) ④相互理解獲得の不可能性、あるいは人間と人間の精神融合の不可能性、

である。これらはすべて「苦悩」という形で我々に襲いかかるが、これら4つの抽象的概念は、すべて同じ鎖状になった輪の一部であり、絡み合い、もつれ合いながら存在してはいないだろうか。つまり、孤独を得た者は人生のどこかで、自らの罪の概念の持ちえる意味を十分に承知しており、またその人間は、自らの運命、境遇、身体はどこかしらにハンディキャップを背負って生きている。無論、罪の意味する真の概念、ハンディキャップの苦悩を会得している人間が、相互理解を得ることの不可能性を悟っていないわけではないのである。

人間の影の部分の構成するこの4つの柱は、我々が生涯格闘していかなければならない隠れたテーマたちなのだ。私は、ライト、ヘミングウェイ、カポーティたちが作品のどこかしらに、人間の自己実現を拒んでいる「影の部分」をメタファーとしてあげ、人間の苦悩の核心を探り出そうとしている所に焦点をあてて考えてみたい。これらの、陽の当たらないテーマたちの内部に抱擁されている深い意味を探り出すのは、困難なことかもしれない。しかし、あえてこれらの問題に挑もうとするのは、これらの問題が、自分を含めたすべての人間が必ず突き当たる壁であり、乗り越えていかなければならない壁だからである。したがって、我々が人生で悟るべき何らかの価値を、このテーマたちは抱えているにちがいないのだ。そしてこの3人の作家たちもまた、それぞれの概念が持つ「裏側」の意味を作品に投影して、生きる意味づけの指標となるものを我々に示しているにちがいないのだ。その「裏側」の意味の示す所が、我々が耐えている影の部分の生活であり、それらの生活は何らかの意味づけをすることで息を吹き返し、光を放つようになる。その光こそ、幸福という概念を含んだ自己実現にほかならない。その光が放たれた瞬間に、これらの苦悩は貴重な人生の糧として、人間を大きくふくらませることだろう。

我々が苦悩と格闘している時、その苦悩の核心は、具体的な色調を持って、鮮烈な問題意識となって、自分自身に変革を仕掛けてはいないだろうか。苦悩の途上こそ、自分という人間を知る機会であるのだ。具体的にどのような問題意識を持って、どんなものに対抗して、どんな感情を大事にしていくか。そうした無意識の中の思考は、人間性形成の核を成す。苦悩、つまり自我の向う方向への常なる問いかけは、我々が自己実現へ至るまでの試練と言うしかない。しかし、いつかその苦悩の厚い壁が、

我々の精神的な意味づけと、強い信念によって打ち砕かれれば、隣り合う生気に満ちて輝いている自我達成の流れに合流することになるのだ。そういう意味で、影を成す苦悩の部分に抱かれている感情こそ、人間の本質を語るものではないだろうか。私は3人の作家たちが、この人間の生活の影を成している部分からどんなことを作品の中で語ろうとしたのか、そしてこの世に何を求め、人間の生から何を得ようとしたのかを、4つの苦悩の柱を軸にして考えてゆきたい。

## 第1章 自己実現と罪との接点

### 1 罪の中の正当性のありか

罪。我々は、「罪」というものに対して、どのような意味づけを、あるいはどれくらいの価値基準の尺度を持っているだろうか。罪とは単に「悪」を意味するだけの尺度の呼称にすぎないのだろうか。ご承知のように、英語では罪をCrimeとSinという2つの違った意味づけを持つ単語として区別している。我々がそれらに着目する時、罪の持つ裏側の概念が浮かび上がってくるのである。人間たちは「罪」という言葉を、ある意味で排他的に、嫌悪的に扱い、自分と「罪」とは一切関係のない世界とでも言いたげに、天使的あるいは偽善的な態度で毎日を送っている。しかし、実際日常生活の影の部分では、いつも自分のうしろに「罪の塊」を引きずって生きているのではないだろうか。法律は、人間の理性や道徳を文字という形を借りて、物理的に存在しているにすぎない。法律という規制の枠組は、「罪」という果てしないテーマの中をふわふわと浮遊しては、人間の理性を捕え、罰という見返りでもってかろうじてその価値が保たれているにすぎないのだ。

まず、この罪の持つ概念の一側面を、ライトの『アメリカの息子』(Native Son 1940)の中で考えていきたい。主人公ビッグ・トーマス(Bigger Thomas)の殺人をめぐる意味づけによって惹き立てられる葛藤が、この作品の中で注目される1つのテーマとなっている。殺人は、どんな場合においても明らかなる「罪」なのであろうか。あるいはまた、罪とは別の何か1つの手段になり得はしないだろうか。自殺の衝動を抱くというのもまた誤った道なのであろうか。これらの疑問を反芻しながら、メアリー(Mary Dalton)殺人前と殺人後のビッグ・青年の内面的な変化に着目し、殺人行為の意味づけの変遷をたどってゆきたい。彼は、殺人

を犯すことになるずっと以前に、自分の人生と罪との関わりを次のように示している。

He knew that the moment he allowed what his life meant to enter fully into his consciousness, he would either kill himself or someone else.<sup>(1)</sup>

彼はこの時、どうして自殺や他殺という概念をあげて、自分の人生との関連を照らし出したのだろうか。殺人の意味する概念は、いわゆる「罪」ではないのか。そう、この時点ではまだ彼にとって殺人は、罪としての、悪としての限定された意味づけしか成されていなかった。というのは、このあとの描写を読むことで理解できる。“So he denied himself and acted tough” 自分の向っている意識、思考の方向は、他の人間の意味するところ、またこの時点では彼自身も認める罪にほかならないことを感じていたから、「自己を否定し、打ち消す」努力をしていたのだ。仮に我々が、そういう意識にかられた場合、つまり「人生というものの意味を十分に意識にはいりこませる」衝動を起こした場合に、人生に対して失望や虚無感を感じ、自殺を考えることは大いにありえることである。しかし、彼のように「誰かを殺す」という概念が、果たして脳裏をかすめて浮かんでくるだろうか。否である。おそらく、ほとんどの人間は、その解決を自殺に求めるレベルで終わってしまうだろう。自殺を促す原因はさまざまだが、大抵は、人生に対する空しさの増大、自己への多大なる嫌悪、心身の苦痛からの逃避など、厭世的、悲観的要素が多い。しかもその方法は、自己の消滅によって諸問題を解決しようとするものであり、罪の問題は、自己の亡骸と共に葬られる。したがって、他者を外的には犯さないですむ分、安全なのだ。我々の中では、人生の意味と、自分の行為の持つ道徳的重要性は結びつくが、人生の意味と、自分の行為の効果の有無の持つ重要性は、結びつけて考えられないのである。つまり我々は、人生の中で、どれだけ自分を道徳的に社会へ貢献できたかという、その貢献の質の程度が重要性を持つのではないだろうか。しかし、ビッガーの場合は、人生の中で自分は社会に対してどんな効果をもたらせたのか、どれくらいの影響をとどろかせたのかが問題だったのである。つまりその質より量が問題だったのである。大切なことは、遠すぎる社会

という舞台が、彼にスポットライトを浴びさせる機会を与えなかったということである。もし彼に、社会に参加する「機会」が与えられていたのなら、この「誰かを殺す」という概念は決して姿を現わさなかっただろう。しかし、「人生というものの意味を十分に意識にはいりこませる」衝動を感じたということは、何かの模索を始めた証左である。つまり、人生の意味の模索自体は、厭世とは反対の、積極的生の方向に向かっていく証拠である。自殺というペシミズム的思想を持っていながらも、たとえ罪という形をとっても、殺人という「思いつき」は彼に何らかの意味づけをもたらしていることは確かである。しかし、この時点ではまだ、罪の意識が彼を抑制していたために、「殺す」という行為が物理的な意味でしか頭をもたげていない。つまり、「殺人」が恐怖と罪のほかに、自分にとってどんな意味を持ち得るのが、具体的にはまだ悟られていないのである。メアリーの死以前、「殺人」は単なる彼の自己表現の1つの手段を示すであろう漠然とした符号だった。

そしてついに、その「殺人」が現実化することで、ビッグーの意識は急速に変化を遂げる。白人を殺害したという行為は、罪の意識の代わりに、彼に別の感情を起こさせた。罪悪とは別の、「一種の誇り」「解放感」「自信」である。こうした感情、積極的感情は何を意味するのか。「殺人」は、ビッグーの中でも「罪」ではなかったのか。この疑問のヒントとなる彼の心理描写がある。

Of late he had liked to hear tell of men who could rule others, for in actions such as these he felt that there was a way to escape from this tight morass of fear and shame that sapped at the base of his life. . . . He was not concerned with whether these acts were right or wrong, they simply appealed to him as possible avenues of escape.<sup>(2)</sup>

ビッグーは、ここではじめて自分の犯した殺人≠罪に、具体的な意味づけを持ち始めた。つまり「他人を支配できる人間」の1人に、自分もここで加わったわけである。しかも、人を支配した究極の状態を手に入れたのだ。他人を支配するという行為は、自分の力が示される、あるいは自分の行為が多大な影響力を持って他に作用するという点で、不思議

と人間を、人間たらしめたような気持ちにさせる。ビッグーにとって、1人の白人の女性の死は、彼の人生の中の自分の力によるはじめて実を結んだ結果としての行為だった。つまり彼にとって、この殺人行為が自己表現にとって変わったのである。彼は、罪とされるものを、正当な意味づけを付与することで、自己実現の結果という価値まで押し上げた。しかし彼が、偶然の殺人を自己表現の結果として受け入れることができたのは、彼をそういう気持ちにさせる何かがあったからである。弁護士マックス(Max)が、この殺人を「創造の行為」と述べた中に、その答えはある。

人の行為が罪とされる過程には、必ず社会の因襲が絡んでおり、これが人間の内的自由の獲得をどれほど拒んでいるか。外的理由上から見た罪と、個人レベルでの内的理由上から見た罪には、あまりにも格差がありすぎる。個人が、その行為を罪としないのには、正当かつ誠実な理由が必ずやあるものである。殺人行為自体は悪を示すけれども、ライトには、その行為自体を彼の境遇に換算した場合、あまりが出るほどの真の悪を浴びせられていた事実がある。したがって「真の悪」と「罪」は、彼をこういう運命に陥れた社会や、盲目で自己中心的人間たちの心の中にあるのではないのか。つまり、マックスの言う「創造の行為」とは、我々1人1人の心の醜い部分、エゴイズムの横行が作り上げた行為だったのだ。彼の殺人をめぐる罪を意味づけるものは、ビッグー個人が問題ではなく、我々1人1人の心に根ざすエゴイズムの抹消の後に成されはじめられるべきものなのである。他者の心を汲みながら、1人1人の人間性を尊重し、理解することから始められるべきものなのである。ライトが描いたビッグー青年は、本来我々に環元されるべき罪を、その社会参加の未熟な状態にとどまったままの彼が、自己実現の一手段として請け負っただけではないのか。

罪に対する言及は、ライトのみならず、カポーティーの『草の堅琴』(The Grass Harp 1951)の作品の中にも思想的に共通するものが見られる。

Spirits are accepters of life, they grant its differences—and consequently are always in trouble. Myself, I should never have been a Judge, as such, I was too often on the wrong side: the law

doesn't admit differences.<sup>(3)</sup>

「法律は、例外つまり相違を受け入れない」この言葉に象徴されるように、クール判事(Judge Cool)は、カーパー老人(old Caper)が黒人娘と結婚したいと望んだ(つまり生き方の相違)ために町から逐われた事実を、人間の内的自由の行使が、いかに法律によってはばまれているかのメタファーとしてここで語っている。そしてさらに、法律では測りえない、人間としての本当の「正しさ」とは一体何であるのかを次の文で語っている。

I sometimes imagine all those whom I've called guilty have passed the real guilt on me: it's partly that that makes me want once before I die to be right on the right side.<sup>(4)</sup>

カポーティがこの作品で描いている罪の思想と、ライトが作品に投影した罪に対する概念は、どこか似ている気がする。いや根底には、全く同じ思想の流れがあるように思う。というのは、カーパー老人、ビッグー、両者とも「悪」としての罪ではないのだ。ビッグーの場合は、殺人という形で罪が問われたが、この行為の背景、原因の根源には、社会の病理、人間の心の醜悪があったのである。ビッグーのまわりの人間たちは、彼が受けてきたさまざまな屈辱と、彼の人間としての存在価値には盲目であり、彼の殺人は単なる法律上の罪としか見てとれないのである。カーパー老人の場合も、悪としての罪ではなく、自分の行為が社会の摂理から外れたためにきせられた虚像の罪にすぎない。つまりその行為に秘められた「愛」という深い意味づけには、人々は盲目なのだ。ビッグーも、カーパー老人も、人間たちが創り上げた偏狭で理不尽で、冷酷な社会の犠牲者である。判事が言う「正しい側に立ち、正しいことをしたい」というのは、有罪の判決を下した人々すべての内的自由の持つ、精神的意味づけを理解したいという心の在り様を意味するのではないだろうか。罪の中に隠されている、愛や障害や、貧困や差別など、さまざまな個人的背景を自分の心に汲み入れる作業、他者を心から理解しようという作業こそ、人間としての本当の「正しい道」なのである。社会からの逸脱が、悪でない限り、「罪」であってはならない。相違は罪ではなく、悪が

罪なのだ。

罪と自己実現もまた、隣り合った層に存在し、互いを侵食しながら、我々の意味づけによって交じり合い、溶け合って法律の土壌へと吸い込まれてゆく。法律が人間の理性から創られるならば、罪とされる概念は、感情からの産物である。私たちが感情を抱くたび、じつはその法律の土壌は、少しずつ崩されているのだ。罪と自己実現の透明な境界線は、我々が「死」と向い合うその日まで、その見えない壁を保ちつつ、つづくしかないのだろうか。

## II. 他者の死と罪の関係——罪とその意味づけ論——

I では、CrimeとSinの両者の側面から、自己実現の結果が、外部的な作用によって法律上の罪へと至る過程を追っていった。そしてライトの「アメリカの息子」とカポーティの「草の堅琴」、2つの作品の思想の共通性を手がかりに、人為的罪、呼称としての罪の背景には、我々のエゴイズムと偏狭な価値観が隠されていたことを導き出した。ここでは、ヘミングウェイの『老人と海』(*The Old Man and the Sea* 1952)を取り上げて、罪の結果として得た他者の死、つまり死と罪との関わりに焦点をあてて考えてみたい。老人にとっての魚を殺す意味づけは、Sinの概念をどこまでくつがえせるか。

You did not kill the fish only to keep alive and to sell for food, he thought. You killed him for pride and because you are a fisherman. You loved him when he was alive and you loved him after. If you love him, it is not a sin to kill him. Or is it more?<sup>(5)</sup>

老人が「罪」について、ひとり回想する場面である。漁師としての老人が魚を殺すことに何らかの疑問を提起しているのだ。

自分の犯した罪の結果が、その生物の死となった場合、人間はどのような感情を抱くのだろうか。確かに、他の生物の生命の火を消す行為は、倫理的、道徳的には許されない。良心の可責を供った、激しい罪悪の重みに打ちのめされるだろう。だが、私は考える、その死が何か罪悪の重みを越えた付加価値を帯びて我々に跳ね返ってきた時、その死を罪悪とは別の感情でもって受け入れられるのではないかと。つまり漠然とした

生命の死が、その瞬間で他の価値に生まれかわるのである。漠然という領域の中では、我々は何かを遂げようとするが、一体その目的がわからない。しかし、その「事を遂げたい」というエネルギーは、一時的に感情に変わり、「罪」の世界に入り込む。感情は理性へとたすきを渡し、ここで「罪悪感」が生まれるのである。この後、漠然とした罪が、しだいに具体性と意味づけを帯びることで、その罪という呼び名は、単なる概念呼称の役割的要素だけになり、罪は「他の価値」に姿を変える。ピッガーの場合は罪が「自己表現の形」になりえ、老人の場合もまた「彼の人間性の投影、あるいは自己実現、あるいは1つの愛の形」になりえたのだ。その死を、精神性に置き換えて、何らかの正当な意味づけを下すことによって、罪はその人間にとって罪でなくなる。ただし、その意味づけは、漠然とした軽く、浮わついたものではだめだ。それは強烈な精神性を帯び、その生命の死、あるいはそれ以上の価値を持った上にさらに「死」を受け入れることがあるいは正しかったのではないかと思えるほどの正当性がなくてはならない。もし、その「死」から、意味づけを何も見い出せず、自分自身を正当化させるだけの激情も生まれてこなかったとしたら、それが裁かれるべき「罪」になるのだ。

罪に、正当な意味づけをすれば、他のものになり変わるという理論は、自己中心的で、ひとりよがりな思想なのかもしれない。というのは、確かにそれが罪であるか否かは、他者からはうかがい知ることのできない、自分の中の問題であるからだ。だからこそ、一般に言われている「罪」を犯した時こそ、自分を見つめる機会、自分と闘う機会である。どうその罪が具体性と精神性を帯びてくるかで、その人間の真価が、人間性が、そして人生に対する態度が問われるのだ。罪悪感が、自己嫌悪の感情が、払拭されうる熱い感情が芽ばえたら、その人間は「罪人」ではなくなる。

老人は、魚を殺すという行為に、けして自己満足を求めているのではない。魚を殺すことで得られる利益や名声などの安っぽい付属品は、むしろ魚の死の持つ意味を陳腐なものにする。つまり、利益主義や物理的要素の行為自体に占める割合が高くなると、その行為は魂を失うのである。物理的、外部的要因がその行為に忍び込み、人間がそれを許すようになると、その行為は「魂の抜けた行為」となるわけだ。「魂の抜けた行為」つまり精神的意味づけのない、ただ黄金色のイメージによってあやつられて生じた「死」こそが、一番危険で、恐ろしい罪なのだ。

老人はこの時、自分自身の行為に対する意味づけと、魚が放つ価値の両者を持っていた。「誇りを持ってやつを殺したんだ。漁師だから殺したんじゃないか」この引用は、老人自身の持つ生命的価値を、「誇り」「漁師」という言葉で示し、彼の自分という1つの生命体の持ち得る価値が、その罪と名のつくものでさえ、ひょっとしたら浄化してくれるのではないかという願いが込められている。あるいはまた、自分の持っている信念、人間性をいとおしむ気持ちの表れでもあろうか。さらに、老人が自分の生命的価値を認めると同時に、相手方(ここでは魚をさす)の生命的価値を認め、その存在が自らを高める助けとなっている点にも注目すべきである。老人は、魚を「愛していた」と言った。この「愛する」という行為が、罪の結果としての死を、他のものになり変わらせる2つ目の要素である。自分自身に正当で、誠実な評価を下し、そこに下されたまっとうな意味づけを認識する作業、ならびに相手方の存在をいとおしみ、敬慕する気持ちを持ち、その生命的価値を自分の中にまで染みわたらせる作業、この2つの要素が、この場合の罪を「罪とはちがうもの」にしている。

罪は、いつも違った形相をして我々にふりかかり、魂を揺さぶり、目元をくらませ、絶えず、人間をその見返りの罰という暗やみに引きずり込もうとする。しかし、時に罪と言われるものの持つ精神的価値は、他の何よりも熾烈で、悲しいほどの情熱を内に含んでいる。倫理や道徳を越えた意味づけは、罪の結果としての死さえも正当化しうる力を備えているのだ。法律という小さな枠は、人間の理性によってのみ存在し、いつも、とらえどころのない罪の空間をさまようしかないのだ。感情が発生するたび、また新たな罪が、否、罪と呼ばれるものが生産される。その感情は、あるいは他者の魂の聖域を犯しているものかもしれない。あるいは、まっとうな人生では抱くことの許されない感情かもしれない。そして時に、自分が他者を「死」へと至らしめる使者となるかもしれない。その時、その行為が、悪とは決して異なった、罪の概念を打ち消せるだけの精神性を帯びた価値を持ちえたのなら、我々は安心していい。法律の手は、道徳の声は、我々の魂までは届きはしない。たとえ不運にも、それらによって裁きを受け、罰という見返りを見舞っても、それは、その人間にとって罪ではなかったのだ。それは、彼の自己実現の正しい形でありえたのだから。

### III. 自己の死と罪の関係

——肉体の結果論としての「自らの死」のとらえ方——

IIでは、「他者の死と罪の関係」つまり、自己実現の結果としての相手の死を述べたので、こんどは「自己の死と罪の関係」、自己実現の結果としての自分の死について考えていきたい。具体的には、再びライトの作品「アメリカの息子」から、ビッグーの自らの死の受けとめ方を追ってゆき、さらにヘミングウェイ「老人と海」からサンチャゴ(Santiago)の対死観を考察する。次いで2つの作品の思想を比較しながら、その根底にあるテーマの共通性を、「自己の死と自己実現の関係」に焦点をあてて考えてゆきたい。

罪と自分の死の存在の仕方には、2つの形があるように思う。IIの最後の所で少し触れたが、1つ目は、法律という裁きによってはじき出された死であるが、これは外部的、世論的な意志に左右され、他者との意識格差の葛藤を引きずる。2つ目は、自己実現のなかばで、生命の危険にさらされ苦闘の中で迎える死である。どちらかと言えば、後者の方が幸運な形と言えるが、注意して考えてみるとこの2つは同じ精神性を持つことがわかる。というのは、どちらも自己実現を果たす途上で迎えた死であるということ、それから1つ目の死はIIで述べたように、法律という物理的要素が自己実現を果たす過程でなんらかの形で絡んだために、死がたまたま結果としてはじき出されたにすぎないということ、である。つまり死の迎え方は、法律というフィルターにひっかかる可能性はあるにしても、死の意味づけは自己実現上の同じものなのだ。「老人と海」の中でこんな文章がある。

‘But man is not made for defeat,’ he said.

‘A man can be destroyed but not defeated.’<sup>(6)</sup>

殺されて自らの肉体が朽ちた時、敗北という意識はよぎりはしないのか。死は人間にとってどんな形で存在するべきか。最大の焦点はここにある。この「殺されるかもしれないが、負けはしない」という一見矛盾した思想を、これから先、論を展開していく中での1つの指標として心に押しとどめておきたい。そしてこの思想を念頭に置いて、再び「アメリカの息子」のビッグーの場合について考えていきたい。彼は、他人を

支配できる人間にあるあこがれを抱き、その行為の中に自分にとっての脱出路を模索しはじめた。そして彼は、殺人という行為を罪という概念からではなく、自己がこの世に及ぼしめたある効果としてとらえた。というのは、彼の場合、自己実現の果たされる場を探そうとしても、社会にその場を隠されているだけでなくその場を探す機会さえも与えられない現実があった。だから自殺や他殺も、自己の表現手段の選択肢の1つになりえたのだ。彼の存在自体が罪とされる社会においても、もはや彼の行為には、法の規制や徳の概念のはいり込む余地などなかったのである。罪という言葉は、彼にとって透明なガラスのようなものであり、その存在は認知していても、意識して見るようにしない限りその壁は見えにくいものなのだ。もちろん彼も、良心とはどういうものなのかは知ってはいても、いわゆる罪という一般概念は、1つの固まった視点からしか見られない安定した形で存在していたのではないのだ。彼はすでにこの時点で、罪の持つ裏側の意味を悟り、その世界を経験していたことになる。というより、彼の自己実現は罪と名のつく世界でしか成し遂げられない厳しいものであったのだ。

彼は、メアリイを殺害したことに対しては、「恐怖のまじった一種の誇り」を感じ、その行為に対しての、いわゆる罪悪感はないように見えたが、通念上の罪の見返りとしての自分の死を意識し始める。だが、自分の死に意味づけをすることで、彼の死に対する観念が変化している所に注意したい。この意味づけで彼は何かを掴んだのだ。

「死」という自己の消滅に対する恐怖。人間は「死」に対してどんな幻想を抱いているのか。「死」は本当に人間が最も恐れるべき対象なのか。人によっては、自ら死を選び、その道こそ自分の救われる道とする人間もいる。だがそれは、自らの「肉体」を葬むことで、この世からの煩悩との関係を絶とうとする衝動なのである。つまり、「肉体」という目に見える対象がある限り、「精神」は「肉体」と共に存在しなければならない。「肉体」は「精神」が伴わないと存在できないが、「精神」はそれ自体で存在しうる。この「肉体」と「精神」の不合理性が、「死」を解く鍵となる。「死」は、肉体のみが行き着く最後の場所であり、決して精神のめざす最終ゴールではないのである。すなわち、全ての人間にとって「死」は「肉体」の成すべき行為なのだ。

ビッガーは、自分の自己表現のはずであったものが、通念上の罪であ

り、最終的には自己の死、自己の消滅を受け入れるしかないという結果に嫌悪した。自分の抱える問題の解決には至らなかったことに失望した。しかし彼は、その「死」が抱えている「精神性」の部分に目を向けることができたのだ。そして彼は再び息を吹き返した。

……that even death would not matter, that it would be a victory.<sup>(7)</sup>

ビッグーは、死を彼の肉体の結果論としてとらえ、精神をその死さえも客観的に見られる位置に置いているのである。彼は、精神の世界で生きはじめたのだ。ここで、冒頭で述べたサンチャゴの言葉が思い出される。「人間は殺されるかもしれない、けれども負けはしない」この「殺されるかもしれない」という概念はまさに、ビッグーが彼の人生の中で今請け負っている状況にほかならず、その見返りとして請け負った肉体の結果論なのだ。そして「けれど負けはしない」この概念もまた、ビッグーの「勝利としての死」の見方なのだ。両者とも「死」は同じ視点、同じテーマで描かれている。「肉体」を借りて生きる「精神」、その「精神」こそ人間が持つ最大の価値である。自分の「死」に対する意味づけは、じつは精神の中にあつた。自我のありかもまた肉体を借りた精神の中にある。「死」とは、その人間が精神性の中に生きていた限り、自分とは何かを悟ろうと輝いた瞬間が一瞬でも訪れた限り、人間が恐れをなす対象ではないのかもしれない。

人間は、罪を殺し、あるいは罪に殺され、自分を悟る機会を得ていくのだろうか。

## 第2章 ハンディキャップからの自己実現

——その克服を鼓舞するものとは？——

人間の自己実現を妨げる壁の1つ、ハンディキャップ。人間は、これを意識せずして生きてゆくことは果たして可能だろうか。また、ハンディキャップを背負った時、人間の自己実現は、達成不可能なものに姿を変えてしまうのだろうか。ここで意味するハンディキャップとは、心身の障害だけを指しているのではない。つまりその意味の他に、外部的力によって後天的に造られたハンディキャップを含むのである。“Discrimination”の概念は、人間の一番深い所にあるだけに、それが人間の心を不

具ぐにしていることには我々はなかなか気づけない。「差別」もまた、課かされたハンディキャップではないのかと私は考える。もっとも、課される理由はもうとう無いのであるが……。

冒頭で述べたように、幸福は自己実現の中で見出すことができるのだが、その自己実現の中にある人間といえども、完全な形のものではないのである。むしろ、自分を生きさせるために思いつく試みは、心の奥にある「わだかまり」によって押さえつけられ、息の根をとめられてしまうことが多いのだ。

努力、希望、良心、自信、愛、こうした言葉が、ハンディキャップを背負った時、どこか浮わつていて、偽善的で、軽々しいものに聞こえてしまうのはなぜだろう。孤独、空しさ、敗北、不運、これらの言葉が、非常な現実性を帯びて、強烈に訴えかけてくるのはなぜだろう。それは、その人間が、人間として生きる可能性を奪われたのではないかという幻想を、そのハンディキャップによって描くからである。時に、ハンディキャップほど人間の意識を狂わせ、魂を苦しめるものはないのだ。というのはハンディキャップを背負う人間ほど、生に対する問題意識や幸福に対する信念は確固たるものだからである。自伝『ブラック・ボーイ』(Black Boy, 1945)の中でライトは、この思想を次のように述べている。

After I had outlived the shocks of childhood, after the habit of reflection had been born in me, I used to mull over the strange absence of real kindness in Negroes, how unstable was our tenderness, how lacking in genuine passion we were, how void of great hope, how timid our joy, how bare our traditions, how hollow our memories, how lacking we were in those intangible sentiments that bind man to man, and how shallow was even our despair.<sup>(8)</sup>

ハンディキャップは、人間が抱くすべての感情を、無残にも打ち砕く力を持っているようである。親切心、思いやり、情熱、希望、喜び、すべてのこうした積極的感情は、空しさの中に、いつも飲み込まれてしまうのだ。この空しさの正体とは一体何なのか。

人間は、じつはその課せられた障害自体が問題ではなくて、その障害

によって自分の人生がある道におさめられ、確定されてしまうことに絶望を抱くのである。自分の可能性と才能は、いつもその障害に飲み込まれ、そのために生きている価値を見い出せない。訪れる喜びや感動は一瞬で姿を消し、波のように自分の中から生気をえぐり取っていく。ハンディキャップを背負う人間は、その闇が、いつも心に影を落としているために、どんなに幸せそうに見えても、どこか寂しげである。

それは、自分にはすべてのものを成し遂げる権利があるにもかかわらず、成し遂げることのできない分野があるからである。自分のめざす理想的な自己実現はできない代わりに、それに近い方法で可能にすることはできる。しかし、自分には絶対に起こすことのできない経験の分野も同時に持っているのだ。つまり自分は、不動の可能性を持っている人間の代わりに、それよりもっと確実な不可能性を持っていることになる。具体的に言えば、足を失った人間が、義足で歩くことによって自己の欲求は達成できても、自分の足で自らを支えて歩くという人生分野は永遠に得られないということである。

人間には、経験しようと思えばできるが、あえて経験しないという人生分野がだれにでもある。しかし、自分には絶対経験不可能な人生分野があるという事実、このまったき事実こそが、ハンディキャップの苦悩の核心ではないだろうか。自己実現への飛翔の試みは、目の前にちらつく虚ろな闇によって拒まれる。人間は、そうした闇に打ち勝つことができるのか。ライトは、自伝の中でこうしたハンディキャップが人間に課す苦悩を、次のように述べている。

I now knew what being a Negro meant. I could endure the hunger. I had learned to live with hate. But to feel that there were feelings denied me, that the very breath of life itself was beyond my reach, that more than anything else hurt, wounded me.<sup>(9)</sup>

「ぼくには抱くことも許されぬ感情があるのだということ、生命の息吹きそのものは、ぼくには手の届かぬものなのだということ」ライトが吐露したこの事実こそ、ハンディキャップを背負った人間の苦悩のすべてを代弁している。具現化される自己実現の過程の中で育まれる感

情と自己実現のさまざまな形とが、ここでの「生命の息吹きそのもの」であることを指している。人間としての完全性(すべての人生分野が経験可能であること)を持つこと、つまり生命の息吹の部分は、その不可能性の中に永久に埋めこまれてしまうのであり、そのことが人間を最も苦しめるのである。しかし、どんな形でなら、このハンディキャップは、自己実現の流れへと合流できるのか。私は「罪」「孤独」「ハンディキャップ」および「相互理解の不可能性」という4つの自己実現を拒む壁の中で、「ハンディキャップ」こそが、人間にとって最も苛酷なものではないのかと考える。なぜなら、障害を背負うこと自体が、すべての積極的な意味づけによってでも、完全には打ち消せない暗い部分を持っており、それが残酷さの原因となっているからである。正当な意味づけによって自己実現を可能にさせる「罪」の概念は、そういう意味でまだ救いの道はあるのだ。しかし、「ハンディキャップ」は、どんなに正当性を持ってしても、完全には治癒できない部分、つまり不可能な人生分野がどうしても残ってしまうのである。

ハンディキャップを背負う人間は、それを常に意識しながら、自己と闘わなければならない。自己実現への道は常に険しく、空しさとの闘いでもある。しかし、自分の持つその不可能性が、あるいは何か別の可能性を噴き出すという幻想を常に思い描くことで、自己実現への突破口が開かれるのではないだろうか。その幻想は、「あこがれ」という切ない形だが確実に人間は、この「あこがれ」によって救われているのだ。ハンディキャップという苦悩は、「耐えること」のみを我々に課しているはずはないのである。不可能性に耐えること、その障害をしっかりと意識下に入れることは、人間にとって非常に苛酷なことだが、その内なる闘いの中に何かが見い出せれば、自分のめざすところの何かが見い出せれば、それを自己実現の過程を行く自分の姿として認識できるはずである。そのことに気づくことができれば、自己実現とハンディキャップとの共存を認めることもできるだろう。不可能性の内に潜む可能性をしばらく出す、経験不可能な人生分野という概念をもみ消し、ただひたすらに情熱的に「あこがれ」を燃やすこと、そうすることで人間は必ず生きられる。たとえどんなに空しさが我々を追いつめようと、「あこがれ」を燃やし続ける限り、人間の魂は朽ちないであろう。なぜなら、そこには自分をその状態に押しとどめておくことを許さない、厳しい向上心が含まれているか

らだ。自分に対するこうした問題意識は、「あこがれ」の裏返しである。ハンディキャップに対する問題意識と闘うこと、この行為自体の持つ意味こそ、人間が放つ最も高貴な価値ではないだろうか。ライトは、そうした「あこがれ」によってハンディキャップの渦中にある自己を励ましつづけ、救い出した人間の1人である。次に示す引用は、彼のあこがれに対する強い意識を最もよく表したものである。

Anything seemed possible, likely, feasible, because I wanted everything to be possible……Because I had no power to make things happen outside of me in the objective world, I made things happen within. Because my environment was bare and bleak, I endowed it with unlimited potentialities, redeemed it for the sake of my own hungry and cloudy yearning.<sup>(10)</sup>

「読書」「話し合い」こうした行為や「あこがれ」を抱くことで、彼は差別や貧困としてのハンディキャップの内に潜む可能性を鼓舞しつづけた。そういう不可能性を刺激しつづける行為の中には、やはり自分を価値のある人間として生かしておきたいという自己実現の要素が含まれているのである。ライトは言う。

I knew that I lived in a country in which the aspirations of black people were limited, marked off. Yet I felt that I had to go some where and do something to redeem my being alive.<sup>(11)</sup>

「ブラック・ボーイ」の中では、この意味合いの文章がよく登場する。つまりライトは、自らの生の証となる行為は、どんな状況でも創り出すことは可能だということを悟って、その思想の実践をしていたのだった。この不可能性とあえて闘う行為の中に、自己実現への鍵が隠されていないだろうか。ライトは、自分が黒人であり、差別を受けているという事実に対して、いつも反抗的態度をとった。しかしこの「反抗的」の意味合いは、差別に対する憎悪を超越した、彼の自己実現達成の機会の模索、あるいは人間的心の交流、信頼というものへの模索の表れなのである。こうした、内に秘めた意識を表に行為として押し出す勇気を持つこ

とが、ハンディキャップ突破への第1歩になりえはしないだろうか。ここで思い出したのだが、「老人と海」の中で老人が何度も口に出す言葉がある。“I am a strange old man”<sup>(12)</sup>「おれは一風変わった年寄りなんだ」この言葉の持つ概念と、ライトの起こした行為は非常に似ていないだろうか。少なくとも、2人の持つ精神性のレベルは同じ所にある。ライトは、自分が黒人として生かされている運命に疑問を持ち、自我を求めて黒人の生活から逸脱した道を歩みはじめた。その逸脱は、黒人としての固定観念追従からの逸脱であり、このように内的欲望を行使することが彼を孤独にもしたのである。つまりここで「一風変わった」という言葉の持つ意味は、さまざまな固定観念からの逸脱を試み、自我の追求に挑んでいる人間(生物)を形容する言葉なのではないのだろうか。ライトは、サンチャゴに言わせれば、「一風変わった黒人」なのである。サンチャゴは、自らの老体と手の負傷と、少年のいない孤独というハンディキャップを背負いながら、老体と負傷と孤独にまつわるすべての固定観念を捨て去り、精神性の中で自らを生きさせようとしたが、その点が彼を「一風変わった年寄り」に仕立てあげているのだ。

ライトの「あこがれ」についての言及は、私にサンチャゴにとっての「あこがれ」をも思い起こさせた。

I wish he'd sleep and I could sleep and dream about the lions, he thought. Why are the lions the main thing that is left?<sup>(12)</sup>

サンチャゴにとっての「あこがれ」は、ライオンの夢に象徴されており、その夢によって彼は、老体と負傷と孤独というハンディキャップの持つ暗い部分を打ち消し、不可能に見える自己実現をあるいは鼓舞していたのではないだろうか。つまりライトの言う、「漠たるままに身を焼くようなあこがれ」は、老人の「ライオンの夢」の中にも交錯しているのだ。老人は、ライオンの中に、人生の「無限の可能性」を見ていたわけである。

ライトや老人サンチャゴに見られるDreamerとしての要素、つまり常なる「あこがれ」への問いかけと、固定観念からの逸脱という形での実践を恐れない勇氣、この2つが、ハンディキャップを自己実現へと結びつけてゆく唯一の方法ではないかと私は考える。ライトと老人サンチャ

ゴは、人間の内に秘められた、こうした思想の勇氣ある実践者として、今日も我々の心を捕えて放さない。

### 第3章 相互理解獲得の不可能性——自己実現と他者との関わり——

ここで述べる我々の自己実現を拒んでいる最後の壁とは、他者と自分の持つ意識の質の格差による、相互理解獲得の困難性である。この問題は、自己実現の行為そのものというより、自己実現獲得の背景にある最も大きなテーマであり、全人間が1つの苦悩として抱える問題である。私は、人間がこの他者との相互理解成就の瞬間を完全には経験できないまま死んでゆくのではないかと、ふと考えるときがある。そもそも罪の問題も、ハンディキャップの克服の問題も、精神的な意味づけと、自らの精神的努力によって自己実現への道を開くために解決できたが、この相互理解の問題は、自分自身の中だけではなく、他者をも巻き込んだ問題である。ある意味で、罪やハンディキャップの問題は、この相互理解の内に含まれる部分的要素なのかもしれない。なぜなら、相互理解を得るということ、つまり自分と他者の意識が互いに照合しあい溶けあうということは、濡れぎぬの罪が他者にとっても罪ではなくなるということであり、一人間の自己実現の結果にもなりうることであり、したがって差別やその他のハンディキャップの問題も頭をもたげないことになったのかもしれないからだ。つまり、すべての自己実現、幸福であるための概念の根本には、相互理解の問題が何らかの形で絡んでいると考えていい。

「アメリカの息子」の中でライトは、差別問題解決の根本にある理念として、「相互理解獲得の重要性」をあげている。作品の中で、彼は、ビッグターの家族を含めたまわりの黒人たちの人生の意味に対する意識の薄さ、そしてドールトン(Dalton)一家に象徴される白人の持つ良識というものの偽善を、「盲目性」という言葉で表現している。ビッグターのまわりの黒人や白人の抱えている日常の「生」に期待する意識は、どれも物事の表面だけをなぞった保守的、慣習的、因襲的なものであり、問題の核心を洗い出そうとする求心的なものではない。特にドールトン氏の慈善は、金銭的援助や物の寄贈といった目に見える物質的な形のものであり、精神性が伴わない分、相互理解への道を一層困難にしているメタファーである。

ライトやヘミングウェイなどは、この「盲目性」に示された人間と人間の間にある意識のズレを、いつも心のどこかに苦悩としてあげ、そのやるせない思いを作品にたくしているように思う。そして「人生や物事を、ある一定の角度で見ることを望む人間がいかに多いか」、このことを人間の戒めのテーマとして作品に投影しているのだ。彼らは、世間から逸脱した人間、つまり自己実現のために内的自由を行使して孤独を得た人間たちを作中で描くことで、我々に生きることの持つ意味と、自我確立との関係を示そうとしたのではないか。人間の苦悩は、世間から「逸脱」した時に人間を襲い、しかしまたそれは自己実現を果たすためには耐えなければならない試練なのである。

「アメリカの息子」でライトは、自己理解と相互理解との関係を、ビッガーとマックスの語りの中で描いている。

If he reached out with his hands, and if his hands were electric wires, and if his heart were a battery giving life and fire to those hands, and if he reached out with his hands and touched other people, reached out through these stone walls and felt other hands connected with other hearts——

if he did that, would there be a reply, a shock?

……But just to know that they were there and warm! ……And in that touch, response of recognition, there would be union, identity; there would be a supporting oneness, a wholeness which had been denied him all his life.<sup>(13)</sup>

「認め合う応答には、結合が、自己確認があるに相違ない」、この概念は、「相互理解」の中に自己確認が含まれる、つまり自己実現の要素は他者との交流の中にも存在することを示している。ライトはこのことを作品中で「信頼」「Confidence」という言葉で表現した。

ビッガーは、罪の概念もハンディキャップの苦悩も、自らの精神的な意味づけによって自己実現へと変換してきたが、ここに他者との間の精神的絆を結びつけることでより確かな自己実現が達成されることを発見した。しかもこの相互理解という概念は、罪とハンディキャップにまつわる孤独をあるいは取り去る力を備えていることも悟ったのではないだ

ろうか。

マックスはビッグーの殺人を含めた行為を、罪とは別の概念でとらえていた。彼は罪の行為の裏にある精神的な意味づけと、ビッグーの境遇や人間としての価値を理解できるだけの苦悩の経験と、人間を心で見える眼を持っていたのだ。つまりマックスも、一定の角度で物事を見ることをやめ、追従からの逸脱をした人間の1人であったのだ。そして世間からは「一風変わった(Strange)」人間であったために孤独を心得ていた1人なのだ。

「老人と海」の中でも、「相互理解」あるいは「信頼」というテーマが老人と少年の心の交流の中で描かれている。2人が魚のませ御飯と投網について、毎日「作りごと」を演じる場面だ。ここに込められたメタファーはまぎれもなく、ライトの言う所の「信頼」の概念ではないだろうか。目の前に存在しないもの、眼には見えないものを、互いの心の照合、融合によって創り上げる。この「作りごと」を演じる行為自体が、老人と少年を精神的なより深い所で結びつかせているのだ。他者から見ればこの行為は、愚かなことと映るかもしれない。しかし、じつはこの行為の中にこそ、「物事を一定の角度で見ることをやめ、因襲追従からの逸脱をした人間たち」の精神が読みとれるのである。相互理解とはこうした、人間の眼には見えない深い部分を互いに照合しあい、尊厳を持って理解しあうことで得られてゆくのではないだろうか。

このように、ライトが作品の中で描いた相互理解についての見解と、ヘミングウェイが「老人と海」の中で描いた相互理解の概念は、全く異なる方法で成されたものだが、作者の意図の根本にあるテーマはどこか共通したものがあるように思える。

ライトはさらに、『アメリカの飢え』(*American Hunger* 1945)の中で、自分と他者との物の見方や内面性のズレがもたらす精神的苦悩を述べている。

I often wondered what they were trying to get out of life, but I never stumbled upon a clue, and I doubt if they themselves had any notion. They lived on the surface of their days; their smiles were surface smiles, and their tears were surface tears……The girls never talked of their feelings; none of them possessed the insight

or the emotional equipment to understand themselves or others  
……all their lives they had done nothing but strive for petty goals,  
the trivial material prizes of American life.<sup>(14)</sup>

ライトはいつもそれぞれの作品の中で、自分の苦悩が他者の側から見た人生に対する盲目、人間に対する盲目から発していることを悟っている。彼の意識として、自己実現が得られない原因の大部分には、相互理解の不可能性が大きく作用していたようである。罪という概念も、差別、貧困を含めたハンディキャップの苦悩も彼は克服したが、相互理解、つまり他者と自分との意識の格差の問題になると幻滅を余儀なくされたらしい。特に、人生観に対しての意識の持ち方の違いには閉口させられている。ライトが作品中、常に問題にしている相互理解の不可能性と人間がぶつかる苦悩の源泉は、じつはここにあったのではないか。我々が遂行しようとする行為にはすべて、俗のしがらみが絡みつき、行為の持つ精神的な自由が奪われている。人間が抱く内的自由が、じつは自己実現の姿であって、世間への追従、法、孤独がこれをはばむ。人間の本当の自己実現は、他者と自分との精神的融合が背景にあり、世間からの逸脱が「逸脱」でなくなる時ではないのか。ビッグーのように、白人を殺害した時、その自己表現的行為には、達成感は存在したが、決して「幸福という概念」の中での達成感ではないはずである。したがって真の幸福というものは、自己が創り出すものだが、自己だけの力では得られないものなのだ。他者との結びつき、その中にも自己実現の要素はある。

マックスとの語りを終えたビッグーは、何と言ったか。「死さえ勝利」と悟ったはずの彼は、「おれは死にたくない」と言ったのである。「死」の問題を再び自分の中に呼び起こし、検討することは何を意味するのか。以前彼は、「死」を自己実現の結果、罰という見返りで受けた肉体の結果として、「勝利」として受けとめていた。しかし、この時彼は、マックスとの関わりの中で「他との精神的つながり」を得る手ごたえを感じはじめていた。そして真の自己実現へ至るためのもう1つの答え「自分が何であるかを知ること」をここで擱んだのだ。つまり彼は死を恐れたのでも肯定したのでもなく、ただ彼が得た答えを確かめたいがために「生」を壟断したのだった。ある意味で、ビッグーの人生は、誇張された形ではあるが、我々が人生の中で経験している感情や意識の一場面を表して

いるにすぎない。だれもが罪を背負い、何らかのハンディキャップを抱え、孤独と闘っているのだ。これらの苦悩を緩和する「相互理解」は我々も求めてやまない永遠のテーマなのである。

他者と自己との精神の融合は、作家たちにとっても人生で最もあこがれた感情の世界であり、また最も不可能性を帯びたテーマだったのである。

「老人と海」の最後の描写を思い出してほしい。まかじきの巨大な尻尾の骨は、切ないまでにそうした人間と人間の精神融合の不可能性を物語ってはいないだろうか。ライオンの夢に秘められた老人の「生」への情熱、舟の上で1人考えつめた愛と罪という概念、まかじきを殺すことに対しての深く神聖な意味づけ、手の負傷、老体に象徴されるハンディキャップとの闘い、自己の持つ力を証明し自己実現を握みかけた時、いつもそれを拒んできた苦悩(さめ)との闘い、それら1つ1つの瞬間に込められた老人の神聖な情感を、だれがこの骨と化した尻尾から理解してくれようか。人は目に見える結果のみを、合理的、理論的に判断をし、評価を下す。人間が抱く見えない価値と、結果にたどりつくまでの努力の過程と、その誠意に秘められた愛情などは、理解されることはないのである。結局、人間の抱く感情の最も深い部分というのは、他者にとっては「見えない」ものなのだ。生きていくことは、それらの見えない価値をどれだけ理解しようと努力することができるかにかかっている。そしてビッグーが得た「他者との精神的つながり」は、この「見えない価値」の中に含まれているのだ。

人間の一番神聖で深い部分は、「アメリカの息子」でビッグーの運命を裁いた「法」のように、「老人と海」で老人の夢を打ち砕いた「さめ」のように、はなやかに安定した力強い外形と形式を持ったものに葬られてゆく。そしてそれらの横行によって、「自己」と「他者」との精神的距離はますます遠いものになってゆくのだ。今日も人間は、この先の見えない空しい試みに挑んでは、相互理解の持つ不可能性を、あるいは可能にしてくれるであろうだれかを心の眼で探すのである。ビッグーにとってのマックスの存在、老人にとっての少年の存在は、作家たちがあこがれた人間像であり、彼らには他者を心から理解しようとする共通の純粋な「精神」が流れているのだ。

我々はたいてい他者との精神的距離に失望し、盲目性に打ちのめされ、

偽善に化かされ自分を見失いそうになるが、それらを克服するには、まず自分が他者を理解しようと努力することが解決への道なのだということを認識しなければならない。相互理解追求のテーマは、じつは自分が何であるかを悟ることへの輪とつながっていて、他者を知ろうとすることが自己理解への第1歩となるのだ。ビッグーが悟ったように、他との接触や応答の中にこそ、自分を知る鍵があるのである。

相互理解の概念をたどっているうちに、カポーティの「草の堅琴」の一節を思い出した。

—but there he is with a dozen different faces moving down a hundred separate streets. This is my chance to find that man —you are him, Miss Dolly, Riley, all of you.<sup>(15)</sup>

ここでカポーティが述べようとした概念の中にも、相互理解を心から願う一人間の切ない思いが込められてはいはしないだろうか。カポーティはこの作品の中で、しきりにこのテーマをのぞかせている。「世界でたった1人の人」「何でも打ち明けられる人」「人それぞれに異なる人生をあるがままに受け入れてくれる人」「妖精」、これらの指し示す概念は、すべて人間にとっての真の理解者を得ることへの切ないあこがれが投影されているのである。

「ブラック・ボーイ」の中のライト自身、「老人と海」のサンチャゴ、「草の堅琴」のドリー (Dolly) を含めた5人は、精神的な面で1つの共通性を持っている。次の引用は、この共通性の裏付けとなるメタファーをよく示している。

Spirits are accepters of life, they grant its differences—and consequently are always in trouble.<sup>(16)</sup>

ライトは、黒人としての生き方からの逸脱をはかり、自分の正しいと思う道を進んだために、社会からの孤立、つまりカポーティの言う所の“Trouble”に巻き込まれた人間になったわけである。老人もまた自らを“Strange old man”と呼び、さまざまな固定観念からの逸脱をはかったために“Trouble”を得た1人になったのだ。「草の堅琴」の木の上の5人

の愚者は、言うまでもなく、世俗からの逸脱者であり、進んで“Trouble”の引き受け手になったのだった。つまりカポーティの述べる“Trouble”とは、法や常識、固定観念によって人間の内的自由が拒まれている世相を反映しているのである。

人間が抱く感情は、すべて自己実現に向っているにしても、それはいつも“Trouble”によって統制され、人間の精神的な部分は決して表面化することはない。

他人が放つ目には見えない価値を、どれだけ自分の心に汲み込むことができるか。相互理解獲得の不可能性は、こうした1人1人の小さな努力によって克服されるのである。社会からの逸脱が「逸脱」でなくなる時、信頼という絆で人が精神的に結ばれた時、この不可能性の概念は、獲得可能の概念に姿を変えるであろう。ライト、ヘミングウェイ、カポーティそれぞれが作品に投げかけた自己実現へのさまざまな問いかけの最終の答えは、「相互理解獲得」の中にあっただのではないだろうか。

## 結 論

人間にとっての罪の位置づけは、精神的レベルの最も深い所で成されなければならない。ライト、ヘミングウェイ、カポーティという作家たちのそれぞれの罪に対する概念は、どうやら一致しそうである。作品の中で罪の言及は、こうした思想の上に成り立っているようだ。つまり単なる呼称としての罪は、法律という社会の因襲によって規定された偏狭な尺度にすぎず、時に「法の横行」は、人間の自己実現を、誤った形で阻止しかねないのである。我々は、罪とされる要素の中にも、善、あるいは愛といった「悪」とは別の深い精神的な意味づけが含まれている可能性があることに気づかなければいけないのだ。それが、社会、倫理からの逸脱行為として「罪」とされるのであれば、罪でないものは一体どこにあるのか。3人の作家は、そうした疑問と戒めを1つのテーマに、真の自己実現の在り方を追求している。

罪、ハンディキャップ、孤独、相互理解獲得の不可能性、この4つの要素は、自己実現を拒む壁として我々を苦しめる。特に4つ目の相互理解獲得の不可能性は、すべての問題の根底にあり、全人間が抱える苦悩の1つでもあるのだ。つまり、真の相互理解が得られれば、罪とされるものが自己実現の結果になりえ、偏狭な価値観、エゴイズムを捨て去り、

強靱なあこがれとその懸命な実践によって、ハンディキャップは自己実現の形へと変貌するのである。また孤独さえも、他者との信頼の絆を結ぶことで消えてゆくのだ。しかし、この相互理解獲得への道は、常に陰しく困難を極めたものである。カポーティの述べた、「人それぞれの異なった人生をあるがままに受け入れる」この思想を、我々1人1人が心に刻み、実践することでその壁は崩壊しうるのではないか。つまり、他者の自己実現の形を尊厳を持って受け入れる行為の中にこそ相互理解への道が開けているのではないか。

罪、さまざまなハンディキャップからの脱皮、これらの社会からの逸脱行為が、じつはその人間にとっての自己実現の形であるかもしれない。それを規制の枠「法・固定観念」といったものを取り外して、その人間の精神性に目を向ける努力、魂が放つ愛情や善や、あらゆる意欲、情熱といったものに目を向ける努力をすることで、その人間と自分の中の精神の融合が可能になるのである。人それぞれの行為の背景にある眼には見えない価値を、自分の心に汲み取ってゆく努力をすることではじめて「信頼」という感情が得られるのではないだろうか。

What one says hardly matters, only the trust with which it is said, the sympathy with which it is received.<sup>(17)</sup>

他者を知ろうと努力することの中に自己発見があり、そうした行為がまた、双方の信頼を呼び起こし、自己実現へと着手する。自己実現達成への4つの壁は、我々の積極的で正しい意味づけと、“Dreamer”としての自分を鼓舞する努力と、そしてさまざまな行為の持つ見えない価値を、他者と自分との信頼によって解き明かしてゆくことで、必ず打ち破ることができる。

「草の堅琴」で町を遂われたカーパー老人、「アメリカの息子」のビッグー、そして「老人と海」のサンチャゴの耳に、クール判事の言うこの言葉、「大切なのは信頼をもって話し、共感を抱いてそれを聞く、そこにある」が届いたであらうか。彼らはきっとこれを聴いて首をそろえてうなずいているにちがいない。そしてこの言葉がまた、全世界の人間の耳に届くことを望むべきであらう。我々1人1人がドリーであり、マックスであり、あの老人と海のマノーリン少年なのだから。

社会からの逸脱が「逸脱」でなくなる時、偽りの罪はぬぐわれ、ハンディキャップは克服可能なものとなり、孤独は消える。すべては、他者との間の「信頼の絆」によって浄化されるのだ。

ライト、ヘミングウェイ、カポーティたちがめざした理想郷は、他者との精神の融合を背景にした、自己実現の形ではなかっただろうか。

### Notes

1. Richard Wright: *Native Son* (The Library of America 1991) p. 453
2. Ibid p. 551
3. Truman Capote: *The Grass Harp* (Vintage International 1993) p. 40
4. Ibid p. 41
5. Ernest Hemingway: *The Old Man and the Sea* (Triad Grafton 1976) p. 90-91
6. Ibid p. 89
7. *Native Son* p. 701-702
8. Richard Wright: *Black Boy* (The Library of America 1991) p. 37
9. Ibid p. 239
10. Ibid p. 70
11. Ibid p. 161
12. *The old man and the sea* p. 56
13. *Native Son* p. 784
14. Richard Wright: *American Hunger* (The Library of America 1991) p. 259
15. *The Grass Harp* p. 41
16. Ibid p. 40
17. Ibid p. 41-42